

## 5. 広域的なまちづくり方針策定におけるワークショップ参加が中学生に及ぼす影響

—千葉県印旛郡印旛村を事例として—

The Influence of Participation in Workshop on Junior-high School Students into the Making Process of City General Plan

—In a Case of Inba Village, Chiba Pref.—

柴田 久\*・土井良治\*・土肥真人\*

Hisashi Shibata, Yoshihiro Doi and Masato Dohi

The purpose of this article is to consider and clarify the junior-high school student's participation into the making process of city general plan. We have the listening workshop with students of Inba Village, Chiba Pref., and distribute the questionnaire to them a week after. Their opinions and answers are analyzed in several measures. As results, below are clarified. 1. Participation to the process makes students think broader on the issues of their own town. 2. It also promotes communication with their parents. 3. This communication lead to the image alteration on their town and interest of town's future.

**Keywords :** Junior-high school Students, General plan, Participation in Workshop, Covariance Structure analysis  
中学生, マスタープラン, ワークショップ参加, 共分散構造分析

### 1. 研究の背景、目的

近年、住民参加の対象として、子供の視点の多様性をまちづくりに活かすことの重要性が、様々な成果と共に認知されつつある<sup>(1)</sup>。しかし公園や施設、特定の街路といった具体的な空間整備と異なり、広域的なまちづくり方針の策定に子供の参加が行われた例は少ない<sup>(2)</sup>。まちの将来を広域・長期的観点で捉えるワークショップ(以下WS)への参加が、子供にとっていかなる効果を有すのかについては未だ具体的に把握されていない<sup>(3)</sup>。

そこで本研究では、千葉県印旛郡印旛村の「都市計画に関する基本方針」の策定過程で行われた、中学生WSを事例に、WS参加が中学生の意識に及ぼした影響を明らかにすることを目的とする<sup>(4)</sup>。具体的には、①WSの場で得られた中学生の村に対する意見の特性、②WSへの参加が中学生の意識に及ぼした影響の具体的なメカニズムを明らかにする。調査、分析方法については、①はWSで出された中学生の意見と、同様に行われた一般住民<sup>(5)</sup>を対象としたWS意見との比較考察、②ではWS後の中学生に対するアンケート調査結果の定性的分析に加え、及ぼした影響の因果構造について定量的明確化を行ったが、詳細は各章の冒頭に示した。

### 2. 研究対象地と中学生WSの概要

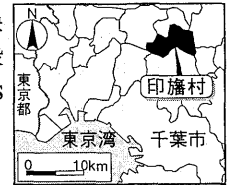
#### (1) 研究対象地の概要【図1】

千葉県印旛郡印旛村は、下総台地突端に位置し、村の東・南側を印旛沼に囲まれている。人口は約9800人(平成10年)で、村東部の市街地開発等に伴い、新住民による人口増加が目立つ一方、進行する高齢化が重要課題

となっている。また、緑地の多い印旛村も、東京都心から50km圏内という地理条件と都心へ直結する鉄道新駅の開設により、今後更なる都市化が予想される。このような状況の中、同村では20年後を見据えた「都市計画に関する基本方針」を策定中であり(平成11年度未完予定)、計画への住民意見反映のため、中学生、新成人、一般住民に対する意見聴取のWSが開催されている。

#### (2) 中学生WSの概要

中学生WS【表1】は「基本方針」のための意見聴取が主目的であったが、プログラムには生徒が楽しめるよう、村に関するカルタ大会といったゲーム的内容も組み込まれている【表2】。意見聴取についても質問を「村のよいところはどこ」等、これまでまちづくりとは無縁の中学生にも親しみやすいものとした【表3】。また、意見を出しやすくするため、1/10000の全村地図を用意し、生徒同士が対話可能な一班5、6人の集団面接形式を採用した。なお印旛村には中学校が1校しかなく、村の全中学2年生が参加し、WSの進行は役場職員、大学生、コンサルタント職員(各12,13,2人)が務め、教師の指導は行われていない点が特記事項としてあげられる。



【図1】 印旛村の位置

【表1】 中学生WS概要

項目	内容
日時	1998年11月18日 午後1～3時
場所	村立印旛中学校体育館 (印旛中は村内唯一である)
参加者	印旛中学校の2年生106人 (印旛村の全中学2年生)
年齢	全員13、14歳
性別	男50、女56人

#### 3. 中学生の村に対する意識分析

##### (1) 分析の方法

\*正会員 東京工業大学大学院情報理工学研究所 (Tokyo Institute of Technology)

【表2】 中学生WSのプログラムの内容

①従場都市計画課長が「都市計画の基本方針」の内容、方針に中学生の意見が反映されることを説明(5分)	②班に分かれ各班で自己紹介、地図上で自分の家の確認(10分)	③新聞紙を用いて全員で村の輪郭線を描く(20m X 30m程度)(20分)	④村の「よいところ」、「望まれる将来像」について話す(各20分)	⑤④で出された内容を題材に各班で2枚カルタ(A2版)づくり(25分)	⑥⑤のカルタを用いて班の代表者によるカルタ大会(30分)	⑦カルタ大会の表彰式(5分)	⑧都市計画課長が中学生意見が多かったものへの今後の対応を説明(15分)
---	--------------------------------	---------------------------------------	----------------------------------	------------------------------------	------------------------------	----------------	-------------------------------------

項目	内容	項目	内容
意見聴取の方法	①班単位で(一班4-6名)、1万分の1の全村地図を用いた集団面接方式 ②班に1,2人の記録進行役(村役場職員・大学生・コンサルタント職員)を配置	実施日	1999年1月30,31日(土・日)
質問内容	①印旛村のよいところはどこ・何かその場所・点をよいたえる理由はないか(以上で20分) ②将来(20年後)印旛村がどの様になることを望むか(20分)	場所など	・印旛全村を3地区に分け、各地区の公共施設で開催し、これに参加不能の住民のために村全体でもう1回村役場で開催(計4回)
時間		参加者	印旛村一般住民43人(地区別には、西10,中央8,東21,全体4人)
		年齢	20代1,40代14,50代10,60代8,70以上8,(男29女13)不明2人
		性別	

ここではWSでの「印旛村のよいところ(以降よいところ)」及び「将来の印旛村に望むこと(望む将来)」について中学生の意見【表5-a,6-a】を分析する。「よいところ」、「望む将来」の各々について、まず意見の全体的な特徴について把握し、続いて同様のWS【表4】で得られた一般住民(以降大人)の意見との比較を行う(【表5-b,6-b】調査内容は中学生と同じ)。これより中学生の村の現在、将来に対する意識特性を抽出し、考察する。

②「よいところ」に関する意見分析

中学生の「よいところ」についての意見全てが、実存する特定の場所、及びそれらの総体である村全域に関するものとなった<sup>9)</sup>。そのため、意見を場所毎に整理し、各場所をよいたえる理由(以降、理由)をまとめた表【表5-a】を用いて以降の分析を行う。更に、意見に上った場所の空間的な分布についても検討する【図2】。

①意見の全体的な特徴【表5-a】

村内の【特定の場所】(□内は表に対応)に関する意

分類	よいと考える理由	数	小計	%	
特定の場所に関するもの	商店(商業施設)	・買い物ができる(3) ・品揃えが豊富である(3) ・家、学校の近くにあり便利である(4) ・歴史が感じられる ・おつりが多いところがある	12	21	17
	農作物直売店(d)	・料理がおいしい(3) ・友達の家が経営している	4		
	公園(e)	・ハンがおいしい ・周囲によく知られている	3		
	公民館(f)	・家に近い(3) ・遊具がある(4) ・行事が行われる(2) ・待ち合わせ場所になる ・遊ぶ(4) ・よく行く ・広い(4) ・思い出がある ・桜がきれい ・景色がいい(4) ・花火が見える(2)	15		
	小・中学校(g)	・施設・遊具がある(3) ・仲間と集まり、遊べる(3) ・思い出がある ・名木、大木がある(2) ・校舎が素敵(3) ・友人に会える ・歴史がある ・遊ぶ(2) ・思い出がある ・ハンワがある ・景色がいい(11) ・思い出がある ・釣りができる(2) ・花火が見える ・風が通り抜けてきもちいい	55		
	橋(h)	・動物がいる ・犬の散歩のコースである ・星が綺麗	14		
	寺社(i)	・歴史を感じる ・落ち着く ・鐘がたたく	3		
	養護学校(k)	・交流がある	1		
	農道(l)	・時計と電話がある	1		
	消防署(m)	・時計があり、便利である	1		
	名物の大塚(n)	・名物、自慢である(2) ・印旛村にしかない ・大きい(2) ・心が落ち着く(2) ・綺麗(6)	8		
	印旛沼(o)	・景色がいい ・自然を感じる ・花火が見える ・釣りができる	3		
	湧水路(p)	・アオコが鮮やかである ・釣りができる	2		
	田畑(q)	・どこかである(2) ・水田が多い ・作物がとれる	4		
	上記の中に適当な指示名称がない特定の場所(r)	・夕日が綺麗(3) ・静かである(2) ・野生動物がいる(2) ・鳥の鳴き声が聞こえる ・のどかである ・化石がある ・景色がいい(4) ・ホテルがある(2) ・緑が多い(4) ・大木(名木)がある ・思い出がある(3) ・紅葉する	19		
村全域	・自然/緑/森が多い(4) ・動物が多い ・空気がきれい(2) ・公園がきれいである ・静かである ・広々としている ・星がきれい(3)	11	9		
合計		123	100		

見が全体の9割を占め、残りの1割は具体的な地点ではない【村全域】の特性を述べたものとなった。【特定の場所】の内訳は、意見全体の約半分が【公共施設・空間】となり、【商店】(17%)、【自然】(14%)がこれに続いた。表中の分類項目には当てはまらない【指示名称のない場所<sup>9)</sup>】も多くあがった(15%)。個別の項目では、【ランド・公園】(15件)、【橋】(14件)、【コンビニエンスストア】(12件)が特に多い。その他、比較的多くあげられたのは、【公民館】、【小・中学校】、地元の【名物の桜】である。その他も含め、中学生は村内の様々な場所に対して多様な理由で愛着を持っており、自分たちの日常生活と深く関連した場所があげられたと言える。

②大人との比較分析

比較のため、大人の「よいところ」の意見表も作成した(【表5-b】理由の部分は省略)。大人は場所以外の【人】【家族】【地域】【農作業・作物】等をあげたが、中学生は既述のように【特定の場所】と【村全域】に関する意見のみである。更に、各々の【特定の場所】と【村全域】の意見数の比が10:1であるのに対し、大人は2.7:1であり、中学生が村全体の特性より個別の場所に愛着を抱く傾向があることが分かる。これは中学生が大人に比して、活動領域が狭く、一定の場所と関わる密度が濃いためであると考えられる。個別の項目については、中学生は大人に比して大幅に【商店】の割合が大きい(各17、1%)。一方、大人は【寺社】の割合が大きい(各10、2%)。以上を除くと【特定の場所】に関する意見の配分は大方共通している。

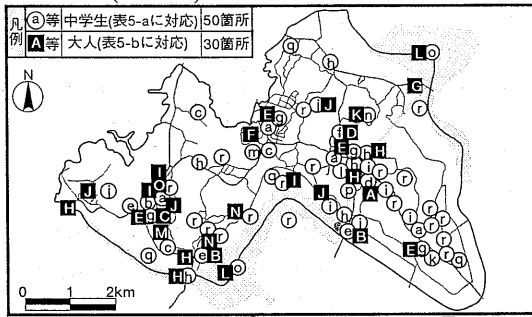
③中学生・大人意見の空間的配置【図2】

全村地図に「よいところ」としてあげられた場所をプロットすると中学生は全50件、大人は30件となった【図2】。被験者数は中学生が多く、意見総数は大人が多いことから、被験者数の大小はこの数に直接表れ

分類	(A)等は【図2】対応	数	小計	%
特定の場所に関するもの	商店(商業施設)	1	9	36
	農作物直売店(A)	1		
	ランド・公園(B)	1		
	歴史民俗資料館(C)	1		
	公民館(D)	1		
	小学校(E)	3		
	病院(F)	3		
	美術館(G)	1		
	橋(H)	12		
	道(I)	5		
	寺社(J)	14		
	名物の桜(K)	4		
	印旛沼(L)	8		
	田畑(M)	1		
	里山(N)	5		
上記以外の特定の場所	9	7		
村全域にわたるもの	28	21		
場所以外	印旛村住民	4	26	23
	家族関係	1		
	地域・人間関係	12		
	農作業・農作物	9		
場所以外で上記以外	5			
合計		136	100	

てはしない。既述したように中学生は具体・個別の場所に、大人は村全域レベルや場所でない要素に愛着を抱く傾向が表れたと言える。場所の分散は中学生の方が全村満遍なくある。これは中学生のプロット数が大人より多いためでもあるだろう。しかし大人のプロット付近には中学生のプロットがあるが、中学生のプロット付近には大人のプロットがないものが比較的多

い。特に村東部<sup>(9)</sup>では顕著であり、しかも〔指示名称のない場所〕(図2のr)が数多く分布しているのが分かる。



【図2】 中学生・一般住民の「よいところ」の空間的配置

(3) 「望む将来」に関する意見分析

「望む将来」では、現存の場所に関する意見は少なく、施設の新設と自然の保全に関する意見が多いため、これらを軸に意見を配列した【表6-a】。

①意見の全体的な特徴【表6-a】

まず、〔商業・娯楽施設〕の建設・増設が意見全体の半数以上を占め(51%)、その内半分は大小の小売店舗についてである(43件/99件)。次に、〔公共施設〕の建設・充実・保存(19%)も多く、内訳としては〔教育文化施設〕と〔交通関連施設〕が大部分を占めた(両者とも14件/37件)。以上のように、意見の大半は諸施設に関連したものであり(70%)、特に施設の新設・増設を望むものは114件(59%)にも登った。施設以外では、〔環境保全〕(16%)が望まれており、中でも〔印旛沼、川の水質改善〕、〔自然・緑の保全〕の割合が大きい(各14、16件)。また、少数ながらも〔開発の抑制〕等の意見もあげられた。さらに、〔相談ができるところ〕、〔落ち着けるところ〕等、

【表6-a】 中学生の「望む将来」 ( )内は同様意見の数

分類	意見内容	数	小計	%		
施設関連	商業・娯楽施設	・既存の店を残す(3) ・娯楽施設の建設(11) ・店舗の全般的な増設(6) ・スポーツ施設の建設(7) ・テレビ局の建設(2) ・タレントショップの建設 ・遊園地・テーマパークの建設(10)	・デパートの建設(23) ・小売店舗の建設(20) ・宿泊施設の建設(3) ・温泉・銭湯の建設(3) ・飲食店の建設(7) ・自販機の増設(2) ・商店街の建設	99	51	
	運動・公園	・大きな公園の建設 ・大きな公営スポーツ施設の建設(2)		3		
	教育・文化	・公民館の更なる利便化 ・現在ある校舎・学校の保存(4) ・保育園の設置	・学校数の増加(4) ・図書館の建設(4)	14		
	文化財	・歴史的建造物を保存(2)	・名物の大塚を残す	3	37	
	交通関連	・交通の便の向上(5) ・バスの停留所・便数の増加(3) ・高速道路の建設	・坂道を平らにする ・鉄道の駅の新設 ・道路の拡幅 ・街灯を増設(2)	14		
	その他	・警察署の設置 ・ニュータウンをつくる	・公衆電話の設置	3		
	施設以外	環境保全	・印旛沼、川の水質改善(14) ・自然・緑の保全・増加(7) ・緑・森・木を残す・増やす(8) ・住民が自然を大切にできるようにする ・ゴミの減少		14 16 1	31 16
		開発の抑制	・今のままでいい(2) ・ビル・マンションを建てない(2)		4	
		行政関連	・村から市になる(3) ・都市化する ・朝夕に定期的にチャイムを鳴らす ・適確化しない	・村にお金がほしい(2) ・来訪者の増加を図る	5 4	13 7
	曖昧なもの	・相談ができるところをつくる ・人がふれ合い、集まれるところをつくる(2) ・落ち着けるところをつくる ・映画で撮影されるようなところになる ・名所・外部に誇れるところをつくる(3) ・世界一星がきれいになる	・遊ぶ場所をつくる(3) ・場所をつくる(2)	13	7	
		合計	193	100		

【表6-b】 大人の「望む将来」

分類	内容例	数	小計	%			
公共施設関連	福祉・厚生施設建設	15	36	40			
	運動・公園施設建設	5					
	下水道浄化槽の整備	1					
	教育・文化施設整備・充実	5					
	文化財保護	1					
	交通関連	7					
	住民間交流	2					
	その他	2					
	施設以外	環境保全			3	21	24
		自然・緑の保全			15		
環境保全条例制定		3					
将来の人口		2					
住民間交流		5					
村内の産業		4					
農業		5					
行政関連		5					
開発の抑制		3					
その他		5					
曖昧なもの	若者の住みよい村にする	2	2	2			
合計		89	100				

曖昧な言葉で新たな場の創出を望む意見も一定数見られた(7%)。意見内容の詳細については、〔タレントショップの建設〕、〔遊園地・テーマパークの建設〕のように実現性を度外視したと思われる意見も幾つか見られる。

②大人との比較分析

中学生と同様に大人の「望む将来」の意見表を作成し(【表6-b】意見内容については簡略化)、両者を比較する。注目すべき点は特に施設関連である。それは、中学生は〔商業・娯楽施設〕の意見が大半を占めたが、大人には1件もないこと、大人の〔福祉厚生施設〕に関する要求が大きいのに対し、中学生には一切見られないことである。また、その他では、〔公共施設〕や〔環境保全〕、〔開発の抑制〕に関する意見は大部分が共通しているが、大人が触れた〔住民間交流〕の促進・〔産業〕の振興・〔農業〕推進等について中学生に意見が見られない。これは、中学生の将来の村の形成手段に関する知識・ポキャラリーの未取得や現時点での必要性の無さに起因するものといえる。意見内容の詳細については、大人は施設、制度、産業・農業の振興など多様であるのに対し、中学生は、単に諸施設の建設といった実体的な変化を提示する傾向があることがわかる。

(4) 本章のまとめ

以上より、中学生の村に対する意見特性は、①村の「よいところ」については、具体、個別的な〔特定の場所〕に意見が集中し、②「望む将来」への意見では、商業娯楽施設建設への偏重や曖昧な言葉による表現が目立ち、産業、福祉施設等の意見は皆無だったことがあげられる。しかし実現性を度外視したと思われる意見や曖昧なものとして現れた意見は、彼等のニーズが直接現れたものであり、現実にとらわれない中学生の持つ自由な発想から来ていると考えられる。

4. WSが与える中学生の意識への影響

(1) 分析の方法

本章では、1度のWS参加の機会がその後中学生の意識に及ぼした影響について分析する。まず、WS参加後のアンケート調査で得られた意見と前章で考察したWS時意見との関連を考察し、次に、WS参加が中学生に及

【表7】 アンケート調査項目

問	内容
1	【WS前後での村に対するイメージの変容】 ●WS参加前後で村に対するイメージが変わったか(選択) ●どう変わったか(自由記述)
2	【WS前後での村の将来への興味関心の変化】 ●WSに参加して村の将来に興味・関心を持ったか(選択) ●どの様な内容か(自由記述)
3	【WSについての家族とのコミュニケーションの実施】 ●WSについて家族と話をしたか (選択) ●どの様な内容か(表4-4の①~⑨から複数選択) ●WS参加前村について家族と話をしたことがあるか(選択)

質問項目	0	20	40	60	80	100%
●村のイメージは変わったか		はい			いいえ	
●将来の村に興味・関心をもったか		はい			いいえ	
●WSについて家族と話をしたか		はい			いいえ	
●WS参加前、村について家族と話をしたことがあるか		時々ある	あまりない	全くない		
		かなりある				

【図3】 アンケート集計結果

【表8】 家族に話した内容の集計結果

コミュニケーション内容	数
①授業が休みになりみんなで集まったこと	18
②印旛村のことについて話をしたこと	53
③印旛村のよいところ、未来について考えたこと	47
④後場の人と話をしたこと	25
⑤大学生や会社の人と話をしたこと	43
⑥印旛村の地図を見たこと	15
⑦新聞紙で印旛村の形を作ったこと	26
⑧カルタ大会をやったこと	45
⑨楽しかったこと	21

ばした影響の具体的なメカニズムを定量的に把握する。

(2) アンケート調査の概要【表7】

アンケート調査はWSへの参加による中学生の意識への影響を把握するため、WSの約1週間後に実施した【表7】。参加した中学生106人に対し、回収数は100(94%)で、うち有効回答数は99であった。

(3) 選択回答の単純集計結果【図3】【表8】

アンケート調査の集計結果【図3】より、WS参加後、それまでの村のイメージが変わった生徒は69%、将来の村に興味・関心をもった生徒は83%である。これよりWSへの参加が中学生の村に対する意識に少なからず変化をもたらしたことが分かる。またWSについて家族と話をした生徒は68%であり、話の内容については【表8】、WS内容の「村のことについて話をしたこと」が53人で最も多く、より内容に踏み込んだ「村のよいところ、未来について考えたこと」も次に多い(47人)。それ以外のプログラム内容である「カルタ大会をやったこと」も多く(45人)、「印旛村の地図を見たこと」、「新聞紙で印旛村の形を作ったこと」との人数差から、競争感覚が強く、運動を伴うプログラム内容が中学生に印象的だったといえる。さらに大学生や会社、役場の人等、普段会うことのない外来者とのやりとりも話されているのが分かる。また、WS参加前では村に関する家族との対話が、「あまりない」、「全くない」と回答した中学生が67%であることから、WSへの参加が家庭での村に関するコミュニケーションを促したことが分かる。

(4) アンケート回答結果とWS意見結果の比較

【表9】 イメージ変容項目

項目	アンケート回答例	数	%
「良さ」の発見・愛郷心の促進	■いいところをいっぱい見つけられた■前よりも村が好きになった■自然がたくさんありとてもいい村だと思った■改めて考えると山田橋からみる風景はけっこういいものだ	32	32
未来への期待・希望	■「こんな風になったら」と未来について色々なイメージを持った■これからだんだん発展していくんじゃないか■期待できる町になるのかな	20	20
新しい地域情報の認識	■知らない所がいろいろ出てきた■ナウムゾウが博物館に飾られてあるって初めて知った■思ったより広い■自分が思っていた以上に自然が豊かだ	18	18
日常的环境への興味	■何とも思わなかった所に少い興味わいた■今までは何げなく通ってた道も色々考えるようになった■友達と「こんなところにあれができれば」とか思う	9	9
「まちづくり」に対する責任感	■ゴミとか落ちていたらたまに拾っている■もっと住みやすい村にしていきたい■もっと村を変えていきたい■自分達が変えようと思えばもっといい所が作れるんだな	9	9
課題・問題点の認識	■駅やマンション等ができて町のようにになってしまう■改めて印旛村の不便さを知り■印旛沼がきれいになったらいいと改めて思う	8	8
参加型計画により村を尊敬	■子供の意見も聞いて取り入れていこうという考えなど■「こんなことまでするほど村は変わっていくのかな■色々なことが考えられているのがよくわかった	4	4
	合計	100	100

①村に対するイメージの変容

自由記述回答の整理<sup>10)</sup>より、変化した村に対するイメージの内容(以下イメージ変容)について、分類された変容項目と整理された記述例を【表9】に示す。これより、「いいところをいっぱい見つけられた」といった「「よさ」の発見・愛郷心の促進」が最も高く(32%)、次いで「こんな村になったらいいなと考える」等の「未来への期待・希望」(20%)がイメージの変容として多く現れているのが分かる。また、今まで知らなかった村の場所を新しく知り得ることとなった「新しい地域情報の認識」(18%)、普段の生活風景を振り返る「日常的环境に対する興味」(9%)が抽出された。以上より、WS時に村の「よいところ」、「望む将来」を話したことが、イメージ変容と大きく関連しているといえよう。さらに、WS時の「よいところ」の分析で考察されたように、村での諸体験が少なく、行動領域の狭い中学生に、友人の意見が新鮮な驚きとして受け取られているのが分かる。また、アンケートでは「村」に対する質問がされていたにも関わらず、回答結果では、「まちづくり」に関する回答「「まちづくり」に対する責任感」、「参加型計画により村を尊敬」が少数ながらあげられた。特に「自分たちが変えようと思えばもっといい所が作れるんだな」や「子供の意見も聴いて取り入れていこうという考えなどすごい」等の意見は、自分たちがまちづくりの一員として認められていることに驚きを感じながらも、今後もまちづくりに関わろうという意志の萌芽が見られるものとして評価すべきだろう。なお、「課題・問題点」といった地域に対する現

【表10】 将来の村に対する興味・関心

項目	アンケート回答例	数	%
都市化への発展	■どのようにこの村が発展していくのか■いろんな開発をしてどんなふうになるのか■村にどの様なものができるか■人口が増えたらいい■将来は東京みたいになっているのか	26	21
変換過程	■もし村が変わるとしたらどんなふうになるのか■これからどのように村が変わっていくのか■楽しみ■自分の生活はこの後どうなっていくのか■実際に村がどう変わっていくのか	20	16
残したい	■村の未来に今までどおり残ってほしいもの■自分が知っている好きな場所はどんな今この良いところはそのままちゃんと残してほしい■今の印旛村良い所がどれだけ残せるか	17	14
公共施設	■駅について■学校のまわり■20年後ニュータウンとしてどうなっているか	16	13
商業施設	■お店などができるかどうか■大きなデパートができていないのか■新しくいいお店など	16	13
生活環境の向上	■もっとよくしていきたいところ■便利になるといい■より一層住みよくなるのか■悪い所はこれから変えていくこと	13	10
環境保全	■これから水が工場の排水などで汚れないか心配。排気ガス等、山が開拓されて水が減ってゆくのはやめて■交通量もこれ以上多くして空気を汚してほしくない■印旛沼の水質保全	6	5
自然	■今ある自然はどうなるんだろう■自然はこのころなのか■今あるもの(森、木)を少しのこして■自然は減らしてほしくない	6	5
自分達が参加するまちづくり	■「村がこんなふうになるっていいな」とか新しい村づくりの発想■自分も大人になったら中学生にこういうプロジェクトを教えてあげたい■将来、希望したことがなっているか	5	4
	合計	125	100

状が中学生に理解されているのも分かる。

②将来の村に対する興味・関心

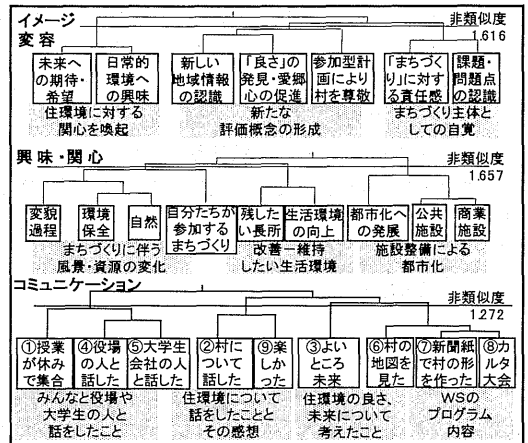
整理結果【表 10】より、「将来は東京みたくなっているのか」といった「都市化への発展」(21%)、「どのように村が変わっていくのか」等の村の「変貌過程」(16%)が興味関心として高いのが分かる。また、「残したい長所」(14%)が次に多く、WS 時の「望む将来」で意見の最も多かった商業施設、公共施設は 13%と比較的少ない。その他も含め、全体として、アンケート結果では空間的に特定しにくい村全域の総合的変化に関するものが多い。このことは、施設整備に集中した局所的な関心が、より広範な「まちづくり」という視点に拡大したことを示している。これは、イメージ変容項目と同様、自分たちがまちづくりの主役になることを期待した「自分たちが参加するまちづくり」が、少数ながらあげられていることにも表れているといえる。

(5)中学生意識に与えた影響のメカニズム

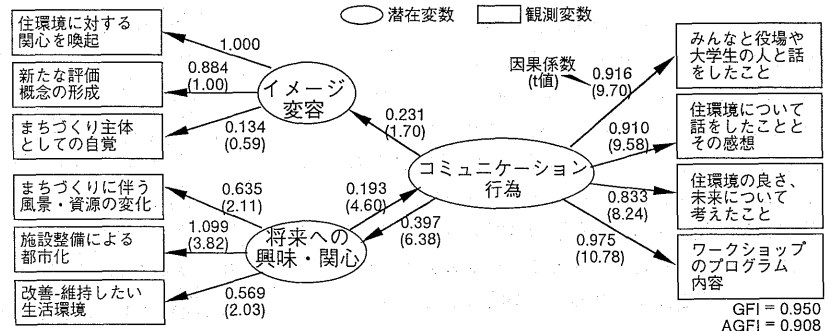
ここでは、前項までに見た、〈イメージ変容〉、〈将来への興味・関心〉、〈家族とのコミュニケーション〉の関係性を共分散構造分析<sup>(11)</sup>を用いて解析し、WS 参加が中学生の意識に与えた影響のメカニズムを定量的に把握する。まずモデル同定に先駆けて、〈イメージ変容〉と〈将来の村に対する興味・関心〉の自由記述回答を、前項で抽出された分類項目をもとに数値データ化<sup>(12)</sup>、クラスター分析による類型化を行った。また、家族とのコミュニケーション内容についても選択結果を数値データとして同様の分析を行った。これより〈イメージの変容〉、〈将来への興味・関心〉について各々 3 類型、さらに〈コミュニケーション内容〉について 4 類型に分類された【図 4】。これらの類型を観測変数として設定し、定量的に把握しにくい、〈イメージ変容〉、〈将来への興味・関心〉といった意識と、〈コミュニケーション行為〉を潜在変数として、因果モデルを同定した【図 5】。適合度指標である GFI 値は 0.950、AGFI 値が 0.908 でありモデル全体の統計的有意性は高い。以下にその因果関係について考察する。

まず〈イメージ変容〉については、「新たな評価概念の形成」に対する因果係数が 0.884 であるのに対し、「住環境に対する関心を喚起」が 1.00 と、より因果の強いことが分かる。しかし、「まちづくり主体としての自覚」への因果係数は 0.134 と低く、中学生

のまちづくり参加への啓発は、今回一回の WS 参加のみでは困難であることが分かる。また〈将来への興味関心〉については、「施設整備による都市化」への因果係数が 1.099 と最も高く、「まちづくりに伴う風景・資源の変化」、「改善・維持したい生活環境」への因果係数はそれぞれ 0.635、0.569 とほぼ同等の因果の強さを示している。コミュニケーション行為については、「WS のプログラム内容」への因果係数が 0.975 と最も高いが、全体的に他の因果係数値も高く、WS 内容についての全般的な会話が行われたといえよう。また〈将来への興味関心〉から〈コミュニケーション行為〉への因果係数は 0.193 と規定されているのに対し、〈イメージ変容〉から〈コミュニケーション行為〉への因果関係は規定されていない。これは、家族に対する WS についてのコミュニケーション行為が、地域に対するイメージ変容からではなく、将来に対する興味関心から強い影響を受けていることを示している。さらに〈コミュニケーション行為〉から〈将来への興味関心〉への因果係数は 0.397 と、先述した逆方向の因果係数 0.193 よりも高いことが分かる。これは、中学生が家族とのコミュニケーションを行うことで、さらに地域への興味関心を促進させることを示している。また〈コミュニケーション行為〉から〈イメー



【図4】 クラスター分析の結果 (樹形図・類型解釈)



【図5】 WS参加が中学生の意識に与えた影響の因果モデル

GFI = 0.950  
AGFI = 0.908

ジ変容)への因果係数は0.231であるのに対し、〈将来への興味関心〉と〈イメージ変容〉の間には、直接的な因果関係は規定されていない。このことから、中学生が抱く村の将来像への興味関心が、コミュニケーション行為を介すことにより、結果的に村のイメージの変容を引き起こす因果関係を持っていることが示された。

## (6) 総合的考察

まず単純集計と自由意見分析の意見変化から、WSへの参加は中学生に対して、地域のよいところを村独自の魅力として再認識させ、普段何気なく見過してしまう住環境について、省察する契機となったことが分かる。そして、WS時の意見に見られた「個別的な場所」や「施設整備という単一的な将来像」という狭い視点から、「村全体の変貌過程」や「まちづくりに対する関心」といった広範な視点へと意識を拡大させる効果が確認された。また、WSへの参加は、中学生に村・まちづくりに関する家族とのコミュニケーションを促す働きがあることも確認された。さらに、因果モデルによる分析より、上記のコミュニケーションは、村に対するイメージを変化させ、興味関心を深化させる働きを持っていた。これより、今回のWSのみでは困難とされた中学生のまちづくり主体としての自覚も、参加の機会が繰り返されることにより、コミュニケーションを介在し、醸成される効果があると考えられる。なお、WS参加によって起こるコミュニケーション行為の有効性は、参加者の固定化、いわゆる、「WSが閉じた空間である」という問題提起に対しても、注目すべき点といえるだろう。WS後に起こるコミュニケーションによって、参加者自身のまちづくり意識が高揚し、さらには、参加者から参加していない人への情報伝達が行われ、参加のまちづくりが波及していく可能性を見ることもできる。

## 5. 結論

本研究の結論は以下の3点にまとめられる。

- ①WS時の意見において、中学生は現在の村の具体・個別な場所に対して愛着を持ち、村の将来には単一的に諸施設の整備を望む傾向があることが示された。
- ②WS後アンケートの分析の結果、WSへの参加が、中学生意識に与えた影響として、地域の良さを再認識させ、地域、将来に対する視野をWS時よりも広げる効果が示された。また、村・まちづくりに関する家族とのコミュニケーションを促す効果が看取された。
- ③アンケート回答の共分散構造分析より、家族とのコミュニケーションが村に対するイメージの変容、村の将来への興味関心を深化させることが明らかとなった。

## 【謝辞】

アンケート調査において、印旛村役場都市計画課、印旛中学校生徒・教師の方々には多大なご協力を頂いた。ここに記して感謝の意を表します。

## 【補注】

- (1)木下らは、中学生のまちづくりへの参加と教育について並木整備計画を事例に、その関係性や計画内容への効果を考察している(文献1)。また、倉原らは子供を視点としたまちかどオリエンテリングの有効性や、子供の視線からのまちづくりへの実践活動を通して、住環境に対する関心と大人への触発について考察している(文献2)。さらに、公園づくりに子供が参加した事例(文献3)等がある。
- (2)都市マスへの住民参加に着目した先行研究として文献4,5など。
- (3)文献6では子どもの成長に従う空間認知の発達について、自己の身体運動より空間内の対象を定位する「自己中心的参照系」から、ランドマークを手がかりに位置や方位を定位する「固定的参照系」、さらに座標を割り当て空間を全体的に認知する「抽象的参照系」と、より高次の参照系が獲得されていくとしている。文献1では論理的思考が可能な段階として中学生を対象としているが、事例とした対象計画が具体的に特定された空間整備であったこと、文献2ではまちづくり方針の長期性・広域性という視点からは十分に考察されていない。また本研究とも1度のWS参加が子供自体に及ぼす影響の明確な測定については深く考察されていない。
- (4)中学生を対象とした理由に、児童・青年との中間世代であり、社会、地域性に対する問題意識を十分に認識でき、現実にとらわれない大人と違った意見聴取が望めるという2面性があげられる。
- (5)中学生、成人式に参加していた新成人というように、年齢を限定せず、広く村内から参加を募った際に対象とした人達を指す。
- (6)質問の際、場所に限定しないよう注意を払ったが、「ところ」の部分を「場所」として受け取った生徒もいたと考えられる。
- (7)一つの意見に対し、複数の「理由」を述べた生徒もいたため、「理由」の欄の合計は、必ずしも「数」の欄の数字に等しくない。
- (8)これらは、中学生自身もその場所をうまく呼称できないが、愛着を持つ固有性の高い場所である。例えば、「瀬戸(印旛村の地名)のあそこ」や「学校の裏」等としてあがった場所を指す。また、地図上でその場所を示すのみで名前をあげない意見も多かった。
- (9)東部は宅地開発が近年行われており、都市化が進んだ地域である。大人は東部地区居住者が最も多かった【表4】にも関わらず、この付近で「よいところ」とした場所がないことは注目される。
- (10)自由記述回答の整理手法として、参加の場で多用されているKJ法(文献7)を使用した。自由記述回答に出現したイメージ変容内容の全てを抽出、グルーピングし、つけられたラベルを変容項目として記述回答を分類した(「村の将来に対する興味・関心」も同様)。
- (11)この分析は、様々な現象の因果関係を調べるために、多くの観測変数を同時に分析できる統計的手法である。また分析状況に固有なモデル構成や、イメージ、価値意識等、直接観測不可能な潜在変数の因果関係のモデル化が可能という優れた性質を持つ。また分析では、現象構造の因果関係をモデルとして仮定、推定計算し、適合指標等の検定よりモデル構成、変数等の改良を重ね、最適な因果モデルを同定していくという手順をとる(詳細は文献8を参照)。
- (12)自由記述回答に含まれる「イメージ変容項目」、「将来への興味関心事」に1、含まれないものについては0をダミー変数として与え、個人ごとの記述内容を数列表形式でデータ化した。また記述内容が曖昧な場合、いくつかの意味内容が含まれる場合は該当する複数項目に1を与えた。コミュニケーション内容については内容を選択項目とし、選択1、非選択0を与え、数値データ化した。

## 【参考文献】

- 1)木下・中村(1994)「飯田市りんご並木整備への中学生参加にみる、参加と教育に関する一考察」、都市計画 No.191, pp88-96, 日本都市計画学会
- 2)倉原・延藤・横山(1988)「まちかどオリエンテリングの有効性に関する考察」、日本都市計画学会学術研究論文集 No.23, pp163-168, 日本都市計画学会/倉原・後藤・日景(1996)「子どもたちの体験活動による住民参加のまちづくり促進に関する考察」、日本建築学会計画系論文集 483号, pp.179-188
- 3)玉川まちづくりハウス(1996)「みんなまでホイッ!!」
- 4)大和田(1998)「東京都調布市におけるワークショップ方式による都市計画マスタープランの策定過程とその成果の評価」、日本都市計画学会学術研究論文集 No.33, pp469-474, 日本都市計画学会
- 5)渡辺(1999)「市民参加のまちづくり」、学芸出版社
- 6)空間認知の発達研究会(1995)「空間に生きる」、北大路書房
- 7)川喜多(1967)「発想法」、中公新書
- 8)竹内・豊田(1992)「SASによる共分散構造分析」、東京大学出版会